

小平市立小平第十一小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

1 調査目的・対象

この調査は全国の公立小学校6年生及び公立中学校3年生の学習状況を把握・分析し、学校における児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的としています。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

●主として「知識」の力を見る国語A、算数A

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技術などが中心の問題です。

●主として「活用」の力を見る国語B、算数B

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容が中心の問題です。

●主として「知識」と「活用」の力を併せて見る理科

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

3 各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

課題

国語Aの正答率は全国より4ポイント高く、話す聞く、書く、読む、言語、全ての領域で2ポイント以上高い。国語Bについても全国より7ポイント上回り、全ての領域で3.5ポイント以上高かった。昨年度の課題であった言語についての問題は、全国より7.7ポイント、都より約4.8ポイント上回った。全校で取り組んだ具体策が成果として表れてきていると考えられる。

唯一都平均を下回ったのは、国語Aの読む領域の問題である。国語Bでも、都平均と同様な数値的な結果が出ている。目的（聞かれていること）に応じて、複数の本や文章などを自分で選んで読むということに困難を感じていることが、個人のデータの分析から分かった。目的に即して文章を自主的に読み取る力を身に付けさせることが課題である。

学校で取り組む具体的な改善策

目的に応じて必要な資料を選び、その文章の必要な内容を抽出して読み取る力の育成に関しては、国語に限らず、その他各教科、領域を含め、問題解決的な思考を要する機会をつくる。その中で『要旨をまとめる問題』、『必要な内容を抽出して表現する問題』等に取り組ませ、文章の構成や表現を手がかりとして、読み取る練習をしたり、文章を限られた字数で要約したり、要旨を書き抜いたりする活動を日常的に取り入れていく。児童が主体的に考え、判断し、表現する能力の向上を目指す。読解力が高まっていない児童に対しては、年6回行われる補習「きりっとタイム」にて学級担任や学年の教師が読み取りのコツやポイントを指導し、基礎的な読解力の底上げを目指す。

【算数】

状況の分析

課題

算数Aの正答率は全国の平均より5.5ポイント高く、算数Bも6.5ポイント高い。数と計算、量と測定、図形、数量関係の4領域ともに、全国平均を上回っている。さらに、昨年度、全国や都の平均と比べて多かった無回答率が算数29問中3問だけとなり、大きく改善が見られた。ただし、算数Bの応用的な問題（示された考えを解釈し、条件を変更、選択して適用する問題）については、都平均より正答率が低かった。

算数Aでは、16問中5問正解した児童（正答率31%）が5名おり、全国平均の倍の値である。算数Bの正答数のグラフが二つ山になるなど学力の二極化の傾向が見て取れる。このことから、児童個々のつまずきを明らかにし、基礎・基本を確実に習得させた上で、思考力を向上させていくようなきめ細かな対応ができる指導体制を構築していくことが課題である。

学校で取り組む具体的な改善策

学力の二極化に対して、習熟の程度に応じたグループ形態の工夫をする。学習内容の習得や習熟に時間がかかるクラスでは、東京ベーシック・ドリルの診断テストを活用して苦手な学習領域を把握し、補習の時間（年6回実施）に個々のつまずいている部分を集中的に指導する。また個人面談等で児童の習得状況を具体的に保護者に伝え、苦手領域のプリントを宿題等に出すなどして、基礎・基本の確実な定着を図る。算数Bの応用的な問題等の対応については、示された考えを解釈し、条件を変更、選択して表現方法を適用する問題を「チャレンジ問題」として月に1回以上取り組ませる。考え方を児童同士が話し合い、時には教え合う活動を行う。応用問題は、苦手意識をもつ児童を出しやすいため、問題に難易度を付けたり、ヒントの提示をしたりするなどの指導上の工夫や適切な支援を行う。

【理科】

状況の分析

課題

理科の正答率は全国平均より3ポイント高く、特に「活用」に関する問題のポイントが7.8ポイント全国平均を上回っている。さらに、どの領域でも高ポイントで推移しており、適切な指導が行われ、確実に児童が知識を習得、活用する力も身に付いていることが分かった。また、理科学習に関する児童アンケートからも興味や関心の高い様子が確かめられた。

16問題中、全国平均より正答率が下回ったのは2問であった。2問とも「人の体の仕組み」に関する内容であり、仕組みについて説明する問題の形式であった。児童アンケートでも「授業で自分の考えをまわりに説明しているか。」の設問で「あまりしていない」を選択した児童が45.5%で全国平均31%より大きく上回った。深い理解を伴った表現力の向上が課題であると考えられる。

学校で取り組む具体的な改善策

実感を伴った深い理解を促すために、復習の時間を設け、既習内容の定着を図る。特に習熟が不十分なグループでは、東京ベーシック・ドリルを活用して復習の時間を大切にする。具体物を用意し、抽象化していく内容を理解できるようにする。また、プリント演習やデジタル教材を利用して知識のまとめをし、理解を深めさせていく。また、習得した知識や自分が立てた仮説や実験の行い方などを周りの友達に説明したり、発表したりする機会を作る。実験・観察は班の人数を少なくし、小グループごとに自分の考えを発表する時間を確保するなどして、一人一人の活躍の場が多い授業を実施して、表現力の向上も目指す。

【質問紙】

状況の分析

課題

自己肯定感が高く目的意識が高い児童が多い。「よいところがあるか」「夢や目標を持っているか」「学校での出来事について話を家族とするか」などの設問では全国より7ポイント以上、高い数値が出ている。学習面では、「宿題」「予習、復習」「計画的な実施」などの項目は全国平均と同程度の結果となった。また、「いじめは絶対に行けないことだ」では「はい」が89.7%であり昨年と比べて22.2%高い数値となった。

肯定的な解答をしたじどうの割合を全国平均と比較すると「考えを工夫して発表する」や「話し合いで、考えを深める」の設問では5%以上、下回っており主体的で協働的に学ぶ姿勢を育成していくことが課題である。生活面では、基本的な生活習慣や家族との良好な関係について10%程度上回った反面、地域や社会に関する全ての設問（5つ）では5%以上、下回った。地域や社会の一員としての自分を意識できるような個の育成が課題となる。

学校等で取り組む具体的な改善策

主体的で協働的に学ぶ姿勢を育成させるには、日常的に体験していることから学習課題を設定したり、児童の必要感や切実感から追求する授業を展開したりすることで各児童の課題意識を高める。さらに、各教科、領域の学習で採用している問題解決的な学習と関連付け、主体的に探究していくような学習スタイルを低学年から系統的に取り入れることにより、協働的に学ぶ姿勢を児童に浸透させていく。また、小グループ（ペアも含む）を活用した学び合いや教え合いを学習課題の特性に合わせ積極的に実施していくことにより、協働的な学習への素地を育む。

また、生活面では、「いのちの学習」を全学年、全学級で実施している。児童の発達の段階や興味・関心を踏まえて作成した本校独自の系統的なカリキュラムを実施することで、地域の一員である自分、社会の一員である自分を感得させるような学習過程を展開し、地域や社会の担い手となる個の育成に努める。さらに、地域社会において自ら実際に行動を起こし、貢献できる場面を意図的に設けていく。